
悪魔憑きの男の物語

夢幻遊戯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔憑きの男の物語

【Nコード】

N1419R

【作者名】

夢幻遊戯

【あらすじ】

とある仕事を営んでいる、ゲーム好きな男が居た。
そんな男の元に、一つの小包が届けられる。
その小包が、彼を戦争と言う舞台へと立たせた。
果たして彼は、その戦争で何を見るのか…？
そして彼は、何を思うのか…。

(前書き)

これは初めて書いた作品、処女作です。

『ストライクウィッチーズ ~ 私恋しちやってます~』を投稿する
前の作品。

言わばプロトタイプです。

何か残ってたんで、折角だから投稿しましたw
よろしければ見ていって下さい。

それでは、どうぞ。

二〇一〇年 九月 二十五日——

暑かった真夏の日が過ぎ去り、ようやく秋の季節が訪れる。ガラガラと照りアスファルトの地面を熱していたあの陽射しも、今ではほの温かい程まで落ち着き、生温かった風も心地良い穏やかな風へと変わっている。

そんな秋の季節が訪れた：九月のある日。今日は生憎の雨だ、朝からずっと降り続け、そして傘を差していても濡れてしまう程強い。窓から外を見ると、傘を差している人の姿は殆ど見られない。

こんな中、誰も余程の用事が無い限り好んで出歩きたくはないだろう。

今日は日曜日だ、折角の休日ぐらい家でゆっくりと過ごしたい。こんな雨の日なら尚更だろう。

「はぁ：冷た」

ドアを開けて一言。

雨に濡れてビショビショになった身体や髪。

雨に濡れたせいで、服が肌に張り付く不快感を我慢しながらまずはリビングへ。

手に提げた今日の夕食の材料を冷蔵庫に入れることを優先させる。

と、家の電話機の留守番電話のボタンが赤く点滅していた。またか…、そう呟きながら溜息を漏らし、点滅しているボタンを押してそのまま風呂場へ。大方、内容は決まっているからだ。

服を脱ぎ洗濯機の中へと放り込み、そのまま浴室へと足を運んだ。雨に濡れ冷えた身体。

シャワーから噴出する温かいお湯を浴びながら、ホッと一息を吐いた。

《私だ。いい加減家に帰ってきたらどうだ？それにお前ももうすぐ二十歳だ、そろそろ結婚して子供を————》

シャワーで濡れた頭をタオルで拭きながら、リビングへと戻る。

再生された留守電の内容は案の上のもの。

そしてシャワーに入ってから結構時間が経つと言うのに、電話はまだ留守電の内容を再生していた。

「まったく、親父たちも懲りないねえ」

未だに流れる留守電の内容、全部聞くのを面倒なので途中で消した。やれやれと呆れながら、ソファに座り机の上に置いた雑誌を手にする。

パラパラと適当に雑誌を捲り、反対の手でドライヤーで髪を乾かすと、再び一本の電話が掛かってきた。

面倒なので放置、出た所で相手はウチの家族に決まっている。

仮に違ったとしても、セールスや何かの勧誘だろう、だからあえて出ないことにした。

数回のコール音が鳴った後、コール音は消える。
そして今度は携帯電話に掛かってきた。

「……………」

携帯電話の画面に表示されていた名前、それは『浅海人形劇場』からだった。

「…もしもし？」

《まったく、出るのが遅いわよ。いったい何してたのかしら？》

聞こえてくる女性の声、その声には若干の苛立ちが孕んでいる気がした。

「別に、今シャワーから上がってのんびりしてたんだけど？」

《ハア…呑気でいいわねえ。それより、今日は何の日か分かってるわよね》

「えっ？なんの日だっけ？なんかあった？」

《…二十五日、アンタ本気で忘れてるの？》

二十五日……………あつ。

「あ……………今日給料日だな」

《そう、給料日よ。さっさと取りに来なさい》

すっかり忘れていた。

毎月二十五日は俺の給料日だ、けれども…今から来い？

「なあ、毎回毎回思ってたんだけどさ。なんで振込みじゃないんだ？
今時手渡ししてないぞ？ 正直取りにいくの面倒なんだけど」

《うるさいわね、面倒なのよ。手渡しの方が楽でしょ？ 主に私が》

「だからって…今から来いってか？ 今メチャクチャ雨降ってるし、
それに俺シャワー浴びたばかりだし、だいたい——」

《ズベコベ言っていないで早急に来ること！ いいわね！？》

そう言って電話を切られた。

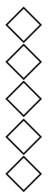
毎度のことながら、俺に選択肢はないらしい。

兎に角アイツのことだ、機嫌を損ねると何をされるか分かったもん
じゃない。

この雨の中をもう一度歩かなければならないと言うのが憂鬱だが、
給料の為だ。

「…帰ったら、もう一回シャワー浴びよつと…」

上着を羽織り、傘を手にもう一度降り頻る雨の中外へと出た。



いつもの様に薄汚い、整理整頓が全く整っていない散らかり放題の
部屋。

沢山のダンボールが至る所に詰まっている。

蓋はガムテープで閉じられた状態。

開けられた様子すら見られない、このダンボールにはいったい何が入っているのやら…。

知りたくも無いし、開ける気も起きない。

外観を見ればとても綺麗な一軒屋だというのに、中はこの汚さ。

…慣れた俺ですら、入る気が滅入る。

「ん？ああ、ようやく来たわね」

部屋の奥。

ダンボールや資料やらで隠されたその奥にはこの汚い部屋には似付かない、立派な机が置かれていた。

椅子も社長が座るようなあの椅子。

その椅子に凭れ掛かりながらポッキーを食べている朱音に、自然と溜息が零れる。

「太るぞ、朱音」

「大丈夫大丈夫、私太らない体質だから」

太る体質の女性陣が聞いたら、嫉妬の眼を向けられそうな発言をする朱音。

やれやれと、再度溜息を零し、机の上に腰を下ろす。

ソファはあるが、ボロボロに破れ綿やらスポンジやら飛び出している。

流石に座る気は起きない。

「で、はいコレ」

机の上に大きく膨らんだ封筒が置かれる。
中身を確認する、パツと見て福沢 諭吉が百人以上封筒に納められていた。

「…随分と多いな」

「貴方の頑張りを称えてよ、感謝しなさい。
ところで、コーヒー淹れるけど飲む？
外寒かったでしょ？」

「ん、頂く」

コイツの名前は浅海^{あさなみ} 朱音^{あかね}、仕事仲間であり俺と“同類”の人間。
コイツと知り合ったのは…今から何年前だろう。
高校を卒業して、暫くしない内に会って…。
そして一緒に仕事をするようになった。

細かい経緯なんかはよく憶えていない。
ただ一つだけ、朱音との出会いは非常に最悪なものだった。
その事だけは今でも鮮明に憶えている。

最初出会った瞬間俺と朱音がしたのは殺り合い。
理由は至ってシンプル、お互いにムシクシャしていた所に出会ってしまい、苛立ちやら怒りを本気でぶつけ合ったというだけ。

コイツは普通の人間じゃない、とても“魔的”な存在だ…なら問題はないだろう。

あの時朱音はどんな心境だったのか、それは今でも知らないし今更聞く気も起こらない。

ただ、きつと俺と同じことを思っていたんだと思う。

結果、辺り一面赤色に染めて、コンクリートも彼方此方壊して、五体満足の状態でお互い向き合い、そして…笑っていた。

それから色々あって、結果一緒に仕事をすることにした。

正確に言えば、俺が従業員となった…が正しい。

朱音がしている人外専門の何でも屋『浅海人形劇場』。

別に人形劇をやっているワケでも、ドールシヨップのように大量の人形が置かれてるワケでもない。

朱音曰くなんとなく、そして名前もとてもメルヘンな雰囲気を漂わせているというのに…一步中へと足を踏み入れたらこの有様、汚い廃墟…イメージぶち壊しである。

「この後、アンタ用事とかあるの？」

朱音が淹れたコーヒーを啜っている時、不意に朱音が尋ねてきた。

「いや、特に何も。強いて言うなら…銀行に貯金しに行くぐらいか？」

「そつ。まあいいわ、それよりも…アンタに届け物よ」

そつと机の上に小包が置かれる。

「差出人不明、朝起きたら私のとこのポストに入ってたわ。手紙付でね」

「手紙？内容は？」

小包を破りながら尋ねる。

朱音が質問に答える前に、小包の中身が先に姿を現した。

そこにあっただのは一つのゲーム、ここ最近発売されたRPG「Fate／EXTRA」だ。

買おう買おうとは思っていたが、時間が経つに連れて存在そのものをすっかり忘れていた。

「儀國 雅史に渡して欲しい…ですって。まったく、何で私のポストに入れるかしら」

「ふーん、何処の誰だか知らないけど有り難いね」

ここ最近暇してたところだ。

仕事も最近来ないし、これと言ってすることもなく、ただインターネットをして過ごす毎日だった。

これで少しは暇つぶし出来そうだ。

「それじゃ給料も貰ったし、早速家に帰って遊ぶとするよ」

カップに残っていたコーヒーを一気に飲み干し席を立つ。

「アンタ、よく差出人不明の相手から送られた物で遊ぶ気になれるわね…」

「でも、ゲームであることには違いないだろ？
だったら遊ばないと損だって」

朱音は呆れ顔を浮かべているが、そんなものの気にしない。

何はともあれ、これは立派な一つのゲームだ。

しかも俺が今までにプレイしたいと思っていたゲーム・
差出人が誰であろうと俺への贈り物だ、なら当然遊ぶに決まってい
る。

病気とか借金以外だったら貰える物は何でも貰ってやる。

「はいはいゲーマーゲーマーっと、それじゃ気を付けて帰りなさい
よ」

「おいおい、お前は俺のお母さんかよ。まあ帰るわ、そんなじゃ」

ヒラヒラと手を振りながら、浅海人形劇場を後にした。



家に帰って早速ゲームをプレイする。

長ったらしい文章は全部スキップ、何かとっても大切な事をキャラ
クターが言った気がしても気にしない。

選択肢が現れた所だけバックログを見て確認する。

選んだサーヴァントは勿論キャスター、最初の頃からキャスターを
選ぼうとは考えていた。

新キャラだし、何より可愛いし。

そしてキャスターからは某割烹着の人を思い出させてくれた。

そんなこんなでいざプレイ。

……開始早々、育成に悩まされる。

最初から分かっていた、キャスターは最弱サーヴァントであるということを。

だから攻撃力（筋力）も防御力（耐久）も紙クラス。

雑魚相手に殺されかねないハラハラ感が常に付きまとう。

プレイしたてだから魔法も何も無い、鏡をぶん回して敵を倒すのみ。
キャクターの外観だけで選んだことを心底後悔した。
けれども頑張ってキャスターを育成した。

キャラクター愛が何とかなる！……————ことはないかもしれないが、
兎に角がむしやらに敵を倒し経験値を稼いで稼ぎまくって、そして
レベルを上げていった。

勿論、魂の改竄も忘れない。

そして初ボス戦のワカメに苦戦させられ、イラつきながらも無事その首を討ち取った。

斃した時は心底嬉しかった、キャスターによく頑張ってくれたと褒めた。

それぐらい嬉しかったのだ。

「つ、疲れた……」

セーブをし、一旦ゲームを中断させる。

開始してから約二時間弱、一回戦を突破しただけでかなりの疲労が身体に押し掛かる。……性的に魔法で攻めるよりも武器でガンガン攻める方が自分には合っている。

魔法が悪いわけではないが…やはり最初はセイバーを選ぶべきだったか……。――。

「…まあ選んだものはしょうがない。最後までやるかあ…」

こうして、キャスターとの二人三脚による聖杯戦争が幕を上げた。



あれから三日間、俺はひたすらプレイをし続けた。
そして、遂に――――

「――――よ、ようやく終わった…」

最後の敵、セイヴァーを斃してようやくキャスターでの聖杯戦争に幕を下ろせた。

長く、そして辛い闘いだった。

最初の頃は育成地獄。

同じ階層で何度も雑魚敵とのバトルを繰り返し経験値稼ぎの日々。

何度も何度も雑魚敵に苦戦し、酷い時は後少しでレベルアップという時に敗北しゲームオーバー。

そんなプレイを繰り返して、ようやく満足に闘えるようになってきた。

今では雑魚も楽勝。

ボス戦でも目標レベルより上をいつているから、全然手強さを感じ

ない。

スキルも今では沢山所持している。

前半での頑張りが、後半でようやく報われたのだ。

と、浮かれていたらまたもゲームオーバーの日々再来。

回復を浚って攻撃をして痛い反撃に合いゲームオーバー。

バトルの際間違ったコマンドを入力して、結果相手に宝具使われてゲームオーバー…。

いったい何回ゲームオーバーをしただろうか、数えたらキリがない。今までプレイしてきたRPGの中でここまでゲームオーバーをしたのは、この作品が初めてかもしれない…。

何度も挫折しかけた…でも、諦めはしなかった。

諦めたらご先祖様…もといキャスターに申し訳ない。

某偉い人も諦めたらそこで試合終了だと言ってくれた。

キャスターは俺のプレイに付き合ってくれた。

そして俺のミスのせいで何回も死に晒した。

ゲームではあるものの、つくづく自分の不甲斐なさが痛いほど悔しい。

だからこそ、最後までキャスターと共に戦い続けクリアすることを決めた。

それが唯一出来る主人公の…俺の責任だと思ったから。

そして今、ようやくその闘いに幕を下ろすことが出来た。

我ながらよくLv40でラスボスを斃せたと思う。

それもこれも、キャスターが頑張ってくれたからだ。

よくやったキャスターよ、俺はお前との日々（プレイ）を忘れるはない。

「さてと…それなら今度はセイバーでやるか…」

タイトル画面でロードを選択。

クリアデータから二週目プレイ開始。

面倒臭いプロローグが自動的に飛ばされ、サーヴァント選択画面へ。選ぶは騎士のサーヴァント。

予選を突破しセイバーとの邂逅。

そしてセイバーをサーヴァントとしての聖杯戦争の幕開け。

アーサー・ペンドラゴンことアルトリアこと、セイバーと全く同じ外観の赤セイバー。

違いは赤色、そして前が透けて下着かレオタードか。

兎に角見えている真紅のドレスに、烈火の如き朱色の大剣…『隕鉄アエストウス エストウスの韃「原初の火」』。

全く中身が別のセイバー…。

自分の事を余と呼び、マスターのことを奏者と呼ぶ。

序盤は高慢な性格が凄まじく出ていたが…、五回戦ではツンデレな一面も見られた。

まあ居てて楽しいタイプの人間と言うか何ちゅーか本中華。

「おお、やっぱり接近戦だな」

くだらないギャグを思い浮かべて、そして画面で戦っているセイバーに感激する。

PSPに向って一言、呟く。

傍から見ればかなり怪しい光景だ。

事実、ゲーム機に向かってゲームキャラに話しかけているから当然のこと。

そして俺の呟きに対する応えは返ってこない。

「…今日はもう止めておくか」

適当な所でセーブし、PSPの本体の電源を切る。

多分長時間プレイして疲れているんだろう、だからあんな幻聴が聞こえたんだ、そうに違いない。

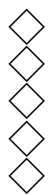
時計を見る、時刻は午後六時前。

ゲームに集中しすぎて気付かなかったが、もう夕食の時間だ。

そして時間を知ったからか、情けの無い音が腹から鳴った。

「さてと、晩飯でも作りますか」

ベッドから身体を起こし、リビングへと向った。



二〇一〇年 十月 二日――

謎の差出人から送られた「Fate／EXTRA」をプレイし始めてから早一週間が経過した。

今日も今日でゲーム三昧、朝からベッドに寝転がりゲームを黙々とプレイする。

キャスターが終わり、今はセイバー共に行動中。
雑魚敵も三手目で斃せるぐらいまで強くなった。
サーヴァント戦も目標レベルより上を行き過ぎて退屈過ぎた。
宝具を使わせる前に斃してしまったこともある。

あのアサシンの言葉を借りぬなら……、
脆弱にも程がある。

…と言ったところ。

ただ、このゲームをプレイしてから奇妙な事が起きるようになった
……。

「よし、レベルアップ。お疲れさん」と

『ご主人様…いつまでその女とイチャイチャしてるつもりですか？
』

「…またか。はいはい分かりましたっての。昼飯喰ったら交代しますよっと」

たまに聞こえる何者かの声。
ゲームをし始めてからセイバーとキャスターの声が聞こえるようになった。

最初はキャスターの声だけだった。
セイバーでプレイしていると、ほぼ毎日恨みが籠った声で自分をプレイするように言ってくる。

一度クリアしたキャラをもう一度プレイする気にはなれず。
それにセイバーの育成もある。

と、放っておいたらプレイしていない時までキャスターの声が聞こえるようになってしまった。

流石にこれはヤバいと感じ、病院に言ってクスリも貰ったが以前効果なし。

朱音に相談したらゲームのし過ぎと呆れられ、自主規制するように怒られた。

ゲームは一日…、と某偉い人の言葉をふと思い出した…。

何者かの魔術や呪術デイスベルによる類のものではない。
仮にされていたら即解呪デイスベルをしている。

いったいこれは何なんだ？

朱音の言う通りゲームのし過ぎが原因なのか？

兎も角治らないのなら方法はただ一つ。
キャスターを満足させるしかなかった。

一つだけキャスターのデータが残っていた、それをロードし適当にプレイ。

アリーナ内をグルグルと周ったり、雑魚敵を倒したりして過ごした。

それで納得したのか、キャスターの声は聞こえなくなった——、

……が！

だが、しかし！

現実是非情だった。

キャスターの声が聞こえなくなったと思ったら、今度はセイバーの声が聞こえるようになってしまった。

やれ“その駄狐の相手をする必要はない”。

やれ“奏者は余の事をどうでもよくなったのか…?” だの…。

二つの声に悩まされながら、俺は毎日ゲームをプレイしている。

今の所、危害はないから気にして無いが……。

「さてと、今日はこの辺りで止めておくとするか。何か疲れたし…」

本体の電源を切り、充電器に繋ぐ。

そして大きく伸びをし時計に視線を向けた。

時刻は午前十一時前、そろそろ昼飯を買いに行こう。

今日は作るのは面倒だから出来ているものにすることにした。



「さてと、今日は何にしよう——」

「あいや待たれいその御仁」

商店街を歩いていた時、誰かに呼び止められた。

声がする方へと振り返ると、そこには何とも怪しげな人物が。

占い師…と言うべきか。

白い布が被せられた机の上には大きな水晶玉がある。

けど、今時全身すっぽりと覆うようなローブを纏う占い師はいない。

その占い師の周りにはガラの悪い、いかにも…という雰囲気放つ男達が。

「た、助けてくれたら無料で占ってあげてもいいわよ…じゃなくて、構わんぞ？」

今一瞬だけ素が出て、そして慌てて言い直した占い師。
どうやら女性らしい。

ガラの悪いあんちゃんに絡まれてるから。ビビッて思わず素が出たんだろう。

何はともあれ声を掛けられたし、女性なら尚更放っておけない。
それに、どうやら向こうは俺に矛先を向けてきた。

「何だガキ」

「いや、まだ何もしてないし。アンタ達に何かしたわけじゃないだろ」

「んだとコラッ！？指の一本や二本で済まねえぞ！！」

お決まりの脅し、しかしその脅しは全然恐怖を感じさせない。
寧ろ鼻で笑ってしまう。

「指一本ねえ…今時古いとか在り来たりと言うか」

ゴキゴキと首の骨を鳴らし、拳を固く握り締める。

「こっちはね、生まれた時からいつ何時命を狙われるか分からない環境の中で育てられたんだ、臨死体験も何度もしたよ。」

だから：お前ら無知で無能なガキとは生きた世界が違うんだよ、失せろ：クズが」

「テメエツ！！ナメた口聞いて——」

言う前に、男の腹部に拳を叩き付ける。

めり込んだ拳、胃液を吐き白目を剥いて倒れこむ男。

喧嘩だ喧嘩だと騒ぎ出す野次馬、何故かニヤニヤとしている占い師。

「野郎！やっちゃまえ！！」

リーダー格らしい男の命令で、次々と向ってくる。

が、所詮相手は素人。

何人何十人と居ようが居まいが烏合の衆に変わりない。

極道の道を生きているのか、それともなんちゃってか…。

本当の恐怖を知らないガキには丁度いい。

立場だけで生きてきた人間に、真の恐怖と痛みを分からせてやろう。

雅史は僅かに不適な笑みを浮かべ——、

「クズが…」

——向ってくる男達を迎え撃った。

容赦なんてものは一切しない、相手の骨が砕けようが折れようが自分にとってどうでもいいことだ。

それに、戦闘ではなく喧嘩をするのは久方ぶり。

たまには人間の戦い方で思う存分暴れるとしよう。

鋭い蹴りを、固く握り締めた拳を顔面に叩き込む。

肉を叩く感触、久方振りに感じた感触を味わいながら男達を斃す。
殺しはしない、殺してしまっただけは只の殺人者に成り下がる。

「がふっ!!」

「どうだガキ共、これが普段弱い者しか相手にしていないお前らと
俺の実力の差だ」

「ぐっ!...」

「これでもかなり手加減したんだけどね...まあいいや、それよりも
...二度とここに姿を見せるな。そうすれば、命だけは助けてやるよ」

「あ、ああ!?! ふざけ——」

「大人しく退け」

一言、男に“命令”する。

伴い雅史の黒の眼が、赤く変色した。

それは血の様に、燃え盛る烈火の様に燦燦とした輝きを見せる赤。
それを見た男達は恐怖に引き攣った顔を浮かべ、声を震わせた。

「な、何だコイツ!?!」

「め、眼が赤く...!!」

「ば、化物!?!」

次の瞬間、男達は悲鳴を挙げながら逃げていった。
これである男達も懲りただろう。

「まったく：おいアンタ大丈夫か？」

占い師の安否を確認する。

占い師は席から立ち上がり、小さく頭を下げた。

「いやいや助かりましたぞ御仁。まったく、私がここで占いをしていただけなのに：あの男達いきなり金を寄越せと」

「在り来たりだな。まあ何事もなくてよかったよかった」

「では、約束通り占って進ぜましょう。尤も、既に結果は出ておりますが：」

「何？あの時もう既に占ってたの？」

「左様。では：貴方は近い内大きな戦争に巻き込まれるでしょう。血で血を洗う戦い：とまでは言いませんが今までに無い波乱万丈の日々が待ち受けております。

ですが、悲観する必要はありません。

貴方を守る剣と盾が貴方の前に立ち塞がる障害を切り裂き、迫りくる困難から身を護るでしょう」

「――」

占い師の言葉を、ただ黙って聞いていた。

とても不吉な結果、近い内に俺はまた激戦に巻き込まれるらしい。

俺を守護する剣と盾、それが何者なのか：はたまた何物なのか。

いずれにせよ、占い師の言葉ではその日は近いみたいだ。

「後、これを持って行きなさい。きっと、貴方の役に立つでしょう」
占い師から小さな袋を渡される。何が入っているのか――、開こうとして、占い師に止められる。

「それは今開けてなりません…、時が来れば貴方が開かずともそれは開かれます…」

「…わかったよ、それじゃ。もう大丈夫だと思うけど、気を付けて」
「ええ、心遣い感謝します」

奇妙な占い師と出逢い、謎の袋を貰い、その場を後にした。
果たしてこの袋の中には何が入っているのか。
中身を気にしながらも買い物の続きをした。



午後から大雨が振り出した。
前が見えなくなる程の豪雨。
ニュースでは午後より激しい雷雨が続くと報道していた。

降り頻る雨、弾丸の如く雨が窓に当たる音に交じり大きな雷鳴が轟く。

稲光も収まる気配を見せる事無く、世界を白に染める。

「ふゝ危ない危ない、降る前に帰れてよかった…」

ベッドの寝転がりながら、「Fate／EXTRA」の続きをする。
もうすぐセイバーとの聖杯戦争も幕が下りようとしている。
キャスターに比べてセイバーは更にその上を行く程強くなった。

そしてまさかの隠しボスも斃した、後は雑魚ラスボスを葬り去るのみ。

「これで終わらせるか、セイバー」

『うむ、共に行こう奏者よ』

ゲームのボイスではなく、直接セイバーの声が耳に入ってくるが気にしない。

一気にセイヴァーとの闘いに決着を付けにいった。

「まそつぷー!!」

宝具を展開、スキル連打で見事セイヴァーを斃した。
そしてエンドクレジットが流れる。

「終わったな…」

BGMを聞きながらベッドの上に寝転がる。

ようやく二週目プレイが終わった。

キャスターよりも楽だったのは言うまでもない。

やはり自分は接近戦が性に合う。

「さてと、どうしようかなコレ…」

二週目も終わった「Fate／EXTRA」、もう持っていても仕方ない。

RPGの欠点は二週目しようという気になれないことだ。

正直レベルアップとか面倒だし…。

アーチャーではプレイしない。理由は特に無いが…。

と、なればこれをゲーム屋に売るか…。

二千円ぐらいで引き取ってくれるだろう。

『ご主人様、今度は私と一緒に出かけしましょ！勿論ずっと！』

『奏者、闘いが終わったからと言って安心してはおるまいな？余と奏者の物語は、これからであるぞ』

「—————」

またも声が無処から聞こえてきた。

それも今度は二人同時に。

セイバーとキャスターが同時に話しかけてくる、なんてことは一度もなかったのに。

そんな風に思っていると、更に驚きの事態が起きる。

『セイバーは引っ込んで下さい！ご主人様は私のご主人様なんですから！ね？ご主人様』

『駄狐、其方こそ身を引くがよい。何と言われようと、余が奏者と共に過ごすことには変わらないのだからな』

『ムツキーツ！！やっぱりむかつきます！ここでいっぺん痛い目見

ますか!?! つーか死んでみますか!?!」

『余に挑むか? 面白い、キャスター如きが余に敵わぬという事を、その身を以って分からせてくれる!?!』

「……ええっと、何この状況」

セイバーとキャスターが会話をしている。

これも幻聴なのか?

それとも、本当にセイバーとキャスターが?

何やらPSPから金属音がぶつかり合う音や、爆発するような音が聞こえてくるのは…きつと気のせいじゃないんだろう。

うん、これは凄い、今までに無い異常事態だ。

昼前占い師が言っていた、今までにない波乱万丈の日々って言うのはこれの事を差しているのか?

「ど、どうしよう…」

未だに聞こえてくる金属音のぶつかり合う音、そして二人の言い争い。

タイトル画面が表示されていても、この中ではセイバーとキャスターが激しく戦っているのだろう。

何となくだが…その光景が思い浮かぶ。

五月蠅いしこのまま電源を落としてしまおう。

電源に指がいった…刹那。

「————ツ」

自室の空気ががらりと変わる。

此方に向けて放たれた何者かの殺気、それは一瞬にして部屋の空気を凍て付かせた。

人の事を言える立場ではない。

が、人でありながらこれ程の凄まじい殺気を出せるものなのか…。

裏に生きる人間だとしても、この殺気を当てられれば意識を失い、下手をすれば死ぬ。

…恨まれるなんてことは日常茶飯事。

この家業をしていたら自然と恨みまで売ってしまう。

その恨みを買ったのは果たして誰か…。

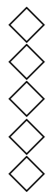
考えてみると沢山候補があがり分からない。

いずれにせよ、敵は俺を狙っている。

なら、俺はそれを迎え撃つ。

死ぬつもりはない、挑まれるのならそれに応え、そして斃すのみ。

未だに激しく闘っている音が聞こえているがこの際無視する。



豪雨が降る中家の外へと出る。

雨で視界が悪い、いつ何処から襲ってくるか分からない。

だが、安易に相手を捕捉出来た。

目の前、凡そ五十歩分向こう…一人の男が立っていた。

「――！！！！！」

「おいおい…、こりゃなんの冗談だ？」

雷鳴が鳴り響き、稲光が世界を白く染める。

その刹那に男の姿が照らし出される。

いったいどんな相手かと思いきや、それは自分の予想を裏切る相手だった。

中国風の衣装、如何にも中国拳法が得意…否、極めた者。

烈火の如く紅い髪、そして…理性を失い狂気に支配された瞳。

元アサシン、現バーサーカーのサーヴァント…李書文。

それが目の前に立っている。

バーサーカークラスと化した李書文、身体も所々データが欠損しているかの様に失われている。

何故…とは、今は思わないことにした。

如何な理由で現れたにせよ、このサーヴァントは俺を狙っている。

今にも地を蹴り、狂気に染まった魔人の拳を叩き込まんとする覇気がヒシヒシと伝わってくる。

「やれやれ…面倒臭いな。お前のマスターは何やってんだか…いや、もう死んでるんだっけ？」

「■■■■――ッ！！！！！！！」

獣の如き咆哮、狂人と化した李書文が襲い掛かってくる。

「ッ！！！」

咄嗟に右に避ける。

僅かに遅れてそこに魔拳が奔った。

これが：サーヴァントの力。

決して体感することのない、サーヴァントの力。

自慢するわけではないが、自分も多くの敵と対峙してきた。

人間から始まり、果てには大悪魔とも：多種様々な敵と闘い、勝ち、そして生き残ってきた。

しかしこのサーヴァント、間違いなく今まで戦ってきたどの相手よりも強い。

相手はあの李書文だ、それに加えバーサーカー化している今。

繰り返し出される魔人の拳を喰らえば、例え数多の闘いを潜り抜けてきた自分でも恐らく一撃で死ぬ。

が、面白い。

この様な形ではあれ、自分はあの李書文と闘っているのだ。

「はっ！！」

迫ってくる魔拳を捌き、懐へと飛び込む。

「燃え尽きろ」

「■■■■——！！！」

一瞬にして碧き炎に包み込まれた李書文。

いくらサーヴァントであり、バーサーカー化しているとは言えども、この炎からは決して逃れられない。

碧の炎は煉獄の炎。

全ての罪を掬い取り、全ての罪に無慈悲と永遠の罰を与える。
地獄の王にして七大罪：憤怒を司りしサタンが生み出したもの…。
最初に見た印象は恐ろしい、禍々しい：というものは一切感じなかった。

アレは正に碧の宝石、パライバトルマリンと例えても過言ではない
ぐらい神々しい：輝きある美しい炎だった。

「■■■■——ッ!!」

碧き炎に包まれた李書文は、咆哮をあげながら身体を容赦なく燃やす炎を振り払おうとする。

その行動は無意味、この煉獄の炎に抱かれれば最後：その者に待つのは魂までも燃やし尽くされるという結果のみ。

「無駄だ、お前はもう終わってる。そのままそこで焼かれ死ね、あの時のセイバーやキャスターの借り、本当の意味で返させてもらったぜ？」

雅史は碧き炎に包まれ燃え盛る李書文を見て、踵を返す。

個人的に、李書文には借りがあった。

五回戦の一日目、不意打ちによりセイバーとキャスターが死にかけた。

アサシン故、暗殺が本業なのは仕方ない。

だが、自分があの場に居たならばこんな失態はなかったと言い切れる。

二人が攻撃を喰らう前に、李書文に一太刀は浴びせられたと…自信を持って断言出来る。それが出来なかったのが少しばかりの悔い。その悔いも、今この場で消えた。

雅史は家に向って歩き出す。

背後からは轟々と音を立て炎が激しく燃え盛る音、そして狂人と化した拳法家の咆哮。

それも数秒後には消え、完全に雨が降る音だけが鳴っていた。



濡れた身体を拭き、自室へと戻る。

「…まだやってるのか」

ベッドの上に放置したPSP、画面はタイトル画面のままだ。しかし、相変わらず金属音がぶつかり合う音が鳴っていた。

「はぁ…やれやれ」

今度こそ電源を切ろう。

電源に指を伸ばし、そして―――、

部屋が一瞬、白く染められる。

そして大きな雷鳴が轟いた。

近くに雷が落ちたと、すぐに理解できた。

そして…何故か手にしていたPSPが爆発した。

「えええええええつ!!!!!!??」

そりやもう盛大に：ドカーンと音を立てて。

爆発で手が吹き飛んでいないか：そんな最悪なシナリオの心配よりも、PSPが壊れてしまったことに俺は嘆いた。

因みに、両手はちゃんとある。

「お、俺のPSPとソフトが……」

部屋に金属の焦げた臭いが漂う。

プスプスと黒い煙を上げて、粉々になった俺のPSP。

“ ” 季節限定の特殊カラーだったのに…… ”

「イタタ：何するんですか!?!」

「それは此方の台詞だ!」

後ろから聞き覚えのある二つの声、粉々になったPSPの破片を手
に掬いながら振り返る。

「「あ……………」」

「……………」

————Fateだから、あの主人公の言葉を借りさせてもらおう。

「ご主人様!」

「奏者!」

なんです…。

(後書き)

まあ、こんな感じでしたね。

最初は、当時ハマっていたのでコレで書こうと思って意気込んだですけど…。

ネタとか設定とか、何やかんやあり中止し、ストライクウィッチーズを書くことにしました。

まあ、こんな作品もあったんだなあ…的に捉えて下さい。
それでは、すわっ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1419r/>

悪魔憑きの男の物語

2011年2月24日01時40分発行